KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM Volume 10

平成21年度 秋季企画展

Yayoi Graffiti

弥生グラフィティー

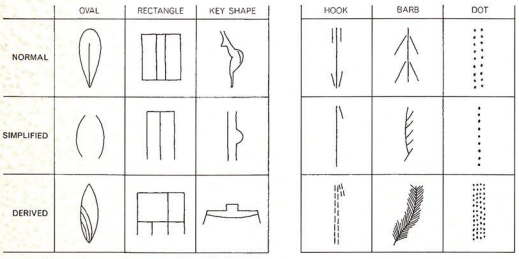
～唐古・鍵遺跡の記号土器～

唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM
2009.10

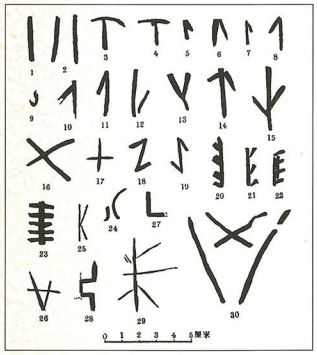
はじめに

私たちの身のまわりには、さまざまな（図）記号が存在しています。例えば、レストランやトイレを示すサイン、また、ある基準に合格した証として付けられる商品マークのグッドデザインマークやJASマーク、その他交通標識や地図記号など、くらしや工業製品生産のさまざまな場面で記号に遭遇します。私たちはそれら記号を理解し、行動しているわけですから、国語としての文字記号に匹敵するぐらいの役割を果たしているといえるでしょう。

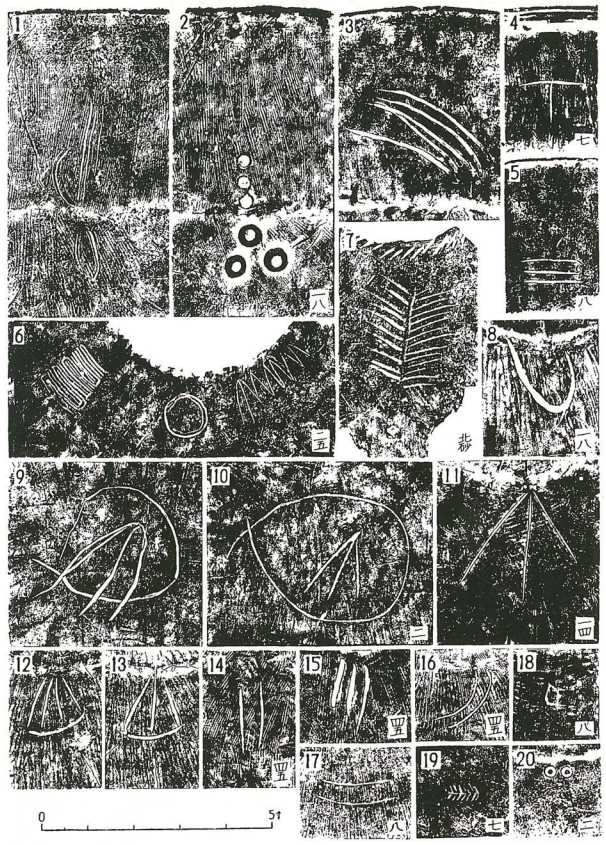
このような記号の発生は、人類が何らかのものを描くという行為、意思伝達をおこなったときから、生まれたと想定してよいでしょう。既に旧石器時代の約3万年前のフランス・ラスコー壁画では、男性・女性を表していると解釈される記号(1)が見つかっていますし、漢字を創作した中国では、約6000年前の新石器時代（仰韶（ヤンシャオ）文化）の西安半坡（シーアンパンポ）遺跡からさまざまな記号(2)が付けられた土器が出土しています。このような記号は、文字が生まれる以前から世界各地に存在し、何らかの役割を果たしていたと思われます。



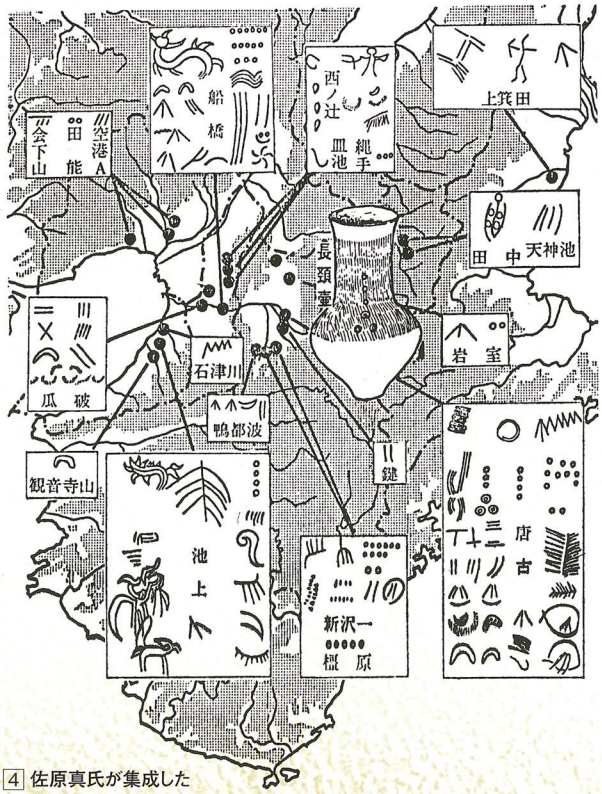
1 旧石器洞穴に描かれた「サイン」



2 西安半坡遺跡の土器「符号」



3 唐古池の調査報告書の「記号的文様」（『大和唐古弥生式遺跡の研究』）



4 佐原真氏が集成した「記号ふうの文様分布」

(1) Andre Leroi-Gourhan「The Evolution of Paleolithic Art」『Old World Archaeology』1968

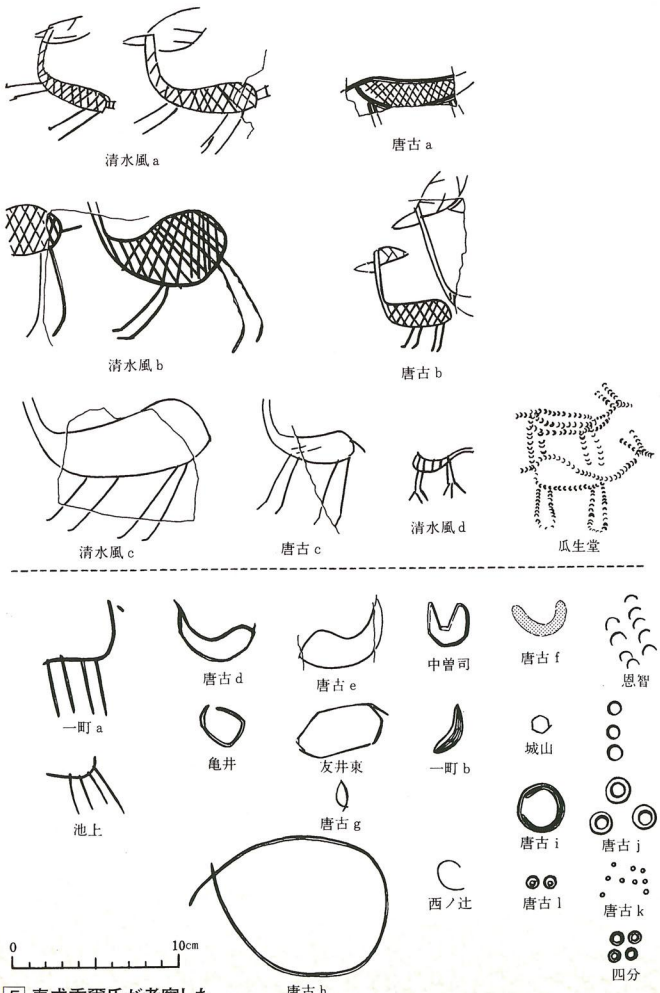
(2) 中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館編「西安半坡」『考古学専刊』丁種第14号 1963

弥生土器の記号　Signs on Yayoi pottery

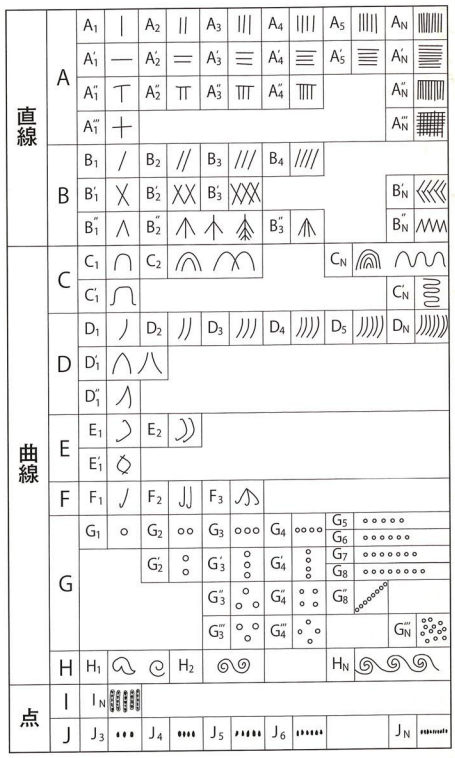
日本において注目されるのは、弥生時代後期の土器に付けられた記号で、大阪府や奈良県を中心に多く出土しています。記号は、ヘラで描いたもの（直線）や直径1㎝ほどの竹管状の工具を押し付けたもの（円形）、赤色顔料や粘土紐（浮文）で表現したものなど、さまざまな方法で土器に付けられています。

これらの記号は、規則的でさらに組み合ったり、並列的に記されたりしており、記号としての体系が整っていることがわかります。このようなことから、森浩一氏は、日本に中国から漢字が伝わらなかったら、このような記号が文字として成立したかもしれないと指摘しています(3)。一方、春成秀爾氏は、弥生時代中期に盛行する絵画土器と記号が連続する関係にあることから、絵画が省略されて記号が成立したと考えています(4)。確かに後期の段階の龍は、記号に変化したとみなされるものがあります。しかし、後期の記号は、絵画の意匠以上にバリエーションがあり、一対一の関係を示すことは難しそうで、一元的にとらえることはできなさそうです。

記号が付けられた土器の多くは壷とよばれる器種で、近畿地方では特に長頸壷という「水壷」的な役割を果たす土器に記されています。これは、記号が盛行する直前の弥生時代中期後半の絵画が壷に描かれた現象と類似しています。このことから記号（文）土器も「ハレ」の場に使われたと推定できるでしょう。ただし、絵画土器が破片でさまざまな遺構から出土するのに対し、記号土器は井戸や環濠を中心に完形土器群として出土することから、「水のマツリ」の時の供献土器として使われたのでしょう。



5 春成秀爾氏が考察した「絵画から記号」への一変化

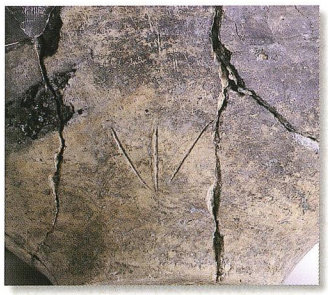


6 藤田三郎による記号の分類図（一部改変）

(3) 大林太良編『高天原神話』シンポジウム日本の神話第2巻 1973
(4) 春成秀爾「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991
(5) 佐原真・高井悌三郎「考古学からみた伊丹地方」『伊丹市史』第1巻 1971
(6) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』1943
(7) 藤田三郎「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』1982

弥生記号の始まり　～弥生時代前期･中期～

縄文時代の晩期の深鉢にも記号的なものが存在しますが、形式的に整っておらず記号として確立しているかは不確定です。やはり、記号として認識できるのは、弥生時代前期の土器に付けられたものからでよいでしょう。唐古･鍵遺跡では、前期前半の壷に2種の記号（⋁･∪／7･8）がみられます。この2種の記号は、その後の弥生時代を通じて記号の基本形となっており、重要な記号として位置付けることができるでしょう。ただし、前期の記号は散発的で、中期に至っても低調であり、微増傾向がみられるのは中期後半からです。

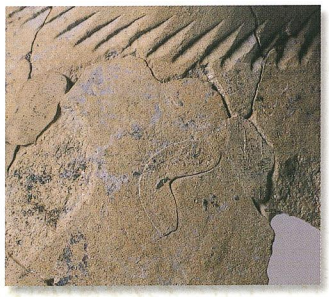


7 胴部下半の記号「⋁」（弥生前期･11次）

8 胴部下半の記号「◡」（弥生前期･1次）

9 浮文による記号「ᔓ」（弥生中期･19次）

10 浮文による記号「𐦐」（弥生中期･48次）



10 記号部分

中期の記号の特徴は、土器焼成後に石器などで刻んでいる（後刻）ことです。多くは壷に記号を刻んでいますが、その位置は口縁部内面・外面、頸部、胴部上半・中央などさまざまなところにみられます。記号の種類は、上向き・下向きの三叉形（⅄・⅄）、╳、▽などであまり多くありません。注目される使い方をした記号土器としては、壷棺（12）があります。このような例は、大阪府勝部遺跡などにもみられ、葬送儀礼との関係もうかがえます。

11 高坏脚部の記号「⋀」（弥生中期・13次）

12 壷棺に刻まれた記号「⋋」（弥生中期・61次）

13 焼成後に刻まれた記号（弥生中期・16次ほか）

弥生記号の体系化　～弥生時代後期～

弥生時代後期になると、爆発的に記号土器が増加し、また、記号の種類もバラエティーに富みます。記号は、ヘラで描いたもの（直線）や直径1㎝ほどの竹管状の工具を押し付けたもの（円形）、赤色顔料や粘土紐（浮文）で表現したものなど、さまざまな方法で土器に付けられています。これらの記号土器は、特に大和川水系の河内や大和南部地域に多く分布し、その周辺部は散在的な状況です。この分布の偏りは、前段階の中期に絵画土器が盛行した地域と重なるため、絵画を描くという行為が記号の発達を促したことは間違いないでしょう。今後、絵画と記号の関係や具象から抽象化への移行があったのか、検討課題もあります。また、記号土器の分布している中心地域から遠く離れた愛媛県や宮崎県、石川県にも出土しており、その関係が注目されます。

14「｜」の記号（24次）

15「‖」の記号（69次）

16「⟍⟋」の記号（33次）

17「‖」の記号（33次）

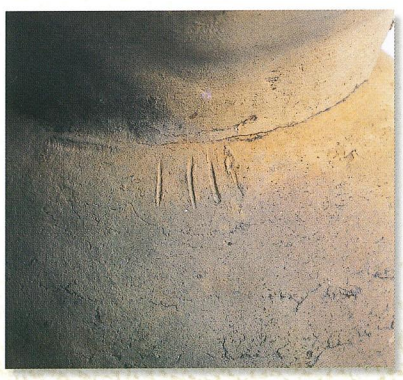
18「川」の記号（1次）

19「川」の記号（62次）

20「川」の記号（69次）

21「川」の記号（74次）

22「川」の記号（76次）



23「川」の記号（74次）

24「〃」の記号（49次）

直線の記号　Straight line

記号は、大きく直線・曲線・点に分類できます。直線の記号は、縦や横の直線を重ねて数の表記のように描いたものが多数みられますが、縦線や横線、長い線や短い線の関係もあり、数字的に使われていたのかどうかはわかりません。直線の本数としては1～4本までが多く、この他、縦線を中心に横線を重ねるものもみられます。

また、1本の直線を重ねる以外に「∨」形や三叉形「⅄」の記号も多くあります。これらは前期以降、継続的に記されており重要な記号のひとつになっています。

25 「—」の記号（3次）

26 「三」の記号（3次）

27 直線の記号（69次）

28 「卌」の記号（79次）

29 「卌」の記号（13次）

30 「卌卌」の記号（62次）

31 「廿」の記号（33次）

32 「⅄」の記号（33次）

33 「⅄」の記号（69次）

34 「⅄」の記号（69次）

弥生記号の体系化

曲線の記号　Curved line

曲線の記号には、「∪」・「し」・「ノ」・「○」などの形をしたものがあります。これらの中で「∪」形の記号は、「⋎」形と同様に前・中期から継続してみられるもので、基本的な記号とみなしてよいでしょう。「ノ」や「○」の形をした記号は、直線の記号と同様に1つの線や点を重ねる形をとっており、数の表記のようにもみえます。

35 「∪」の記号（33次）

36 「∪」の記号（79次）

37 「∩」の記号（14次）

38 「へ」の記号（34次）

39 「ノ」の記号（69次）

40 「し」の記号（14次）

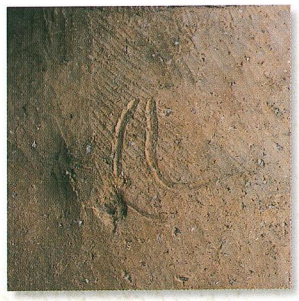
41 「う」の記号（69次）

42 「⋎」の記号（69次）

43 「し」の記号（13次）

44 「川」の記号（69次）

45 「し」の記号（37次）



45 記号部分

46「𐐒」の記号(8次)

47「𐐓𐐓𐐓」の記号(14次)

48「𐐔」の記号(3次)

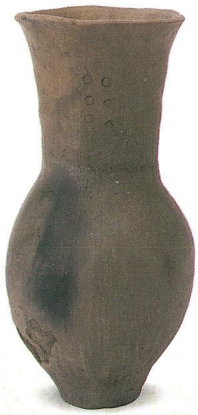
48 記号部分

49「𐐕𐐕」の記号(74次)

50「𐐕𐐕」の記号(74次)

51「𐐕𐐕𐐕」の記号(1次)

52「𐐕𐐕𐐕𐐕」の記号(14次)



53「𐐖」の記号(79次)

54「𐐗」の記号(79次)

55「𐐖」の記号(69次)

弥生記号の体系化

点・連続の記号　Dot and continual signs

直線や曲線の記号以外に、点を1つ付けるか、多数をランダムに付けるものがあります。また、一局部にジグザク状や波状で表現するものもあります。これらの記号は直線や曲線の記号に比べ、規則性がよくわかりません。

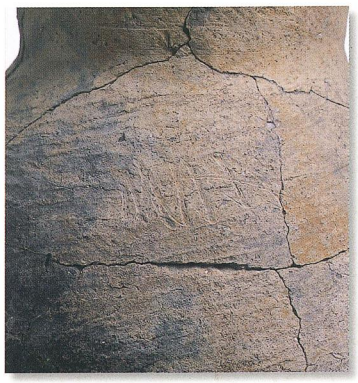
56「●」の記号(37次)

57「●」の記号(76次)

58「」の記号(75次)

59「」の記号(76次)

60「」の記号(69次)



60 記号部分

61「」の記号(69次)

62「」の記号(69次)

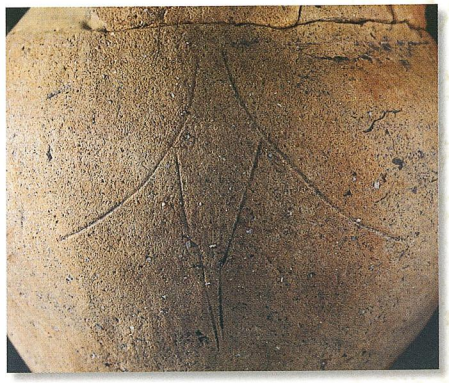
63「」の記号(33次)

記号の組合せ　Combination of signs

基本的には、直線や曲線の記号が単独で描かれていますが、それらが組み合わされ新たな記号になっているものがあります。このことは、記号の新たな展開を示しており、記号体系として確立したことを表しているでしょう。

64「𐤀」の記号（33次）

65「𐤁」の記号（33次）



65 記号部分

66「𐤌」の記号（62次）

67「𐤃」の記号（62次）

68「𐤄」の記号（33次）

69「𐤎」の記号（69次）

70 組合せの記号（14次ほか）

並列の記号　Signs put in a row

直線や曲線の記号が組み合わされ新たな記号になったものがある一方、単独の記号が並列的に配置され、複数の記号で構成されるものも出現します。この複数の記号で展開する構図は、弥生時代中期にみられた並列的構図を有する絵画土器と類似する点がありますが、抽象化された記号からは、その変化を読み解くことはできません。記号として新たに展開しており、その意味も絵画土器と違っているかもしれません。

71 並列の記号(14次)

72 並列の記号(65次)

73 並列の記号(65次)

74 並列の記号(69次)

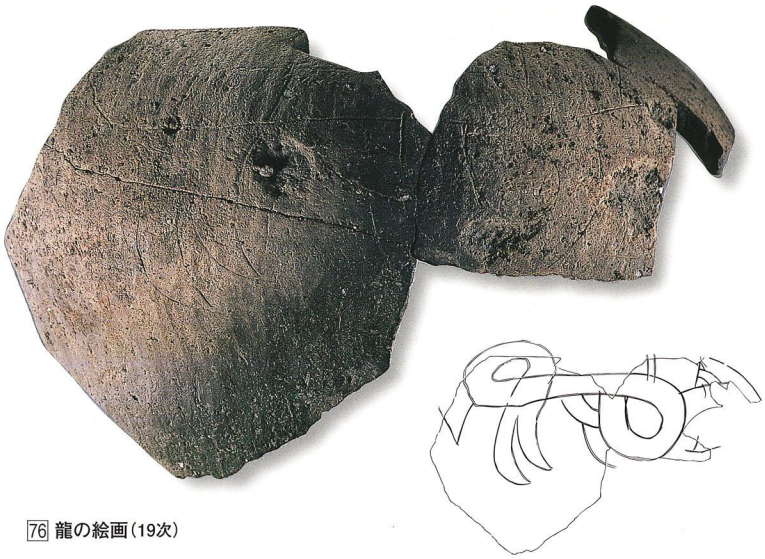
75 並列の記号(62次)

記号の終焉

絵画・記号・文様　Drawings, signs and design

弥生時代中期から後期の流れは、巨視的にみると、中期に盛行した絵画土器が収束し、新たに記号土器が盛行することになります。これは、絵画土器の意匠（具象図）一つ一つに意味をもたせていたという行為（読解力）が、素地となって次段階の記号（抽象・象徴記号）が発達したととらえることができるでしょう。後期の段階には、稚拙で退化した絵画と明確な意図のもと表現された記号が組み合わされているものがあり、そこには記号を読み解く鍵がありそうです。

しかし、後期後半から終末期になると、記号も退行現象がみられるようになり、バリエーションが少なくなります。このような衰退する絵画や記号がある中、龍を表す絵画（76）・記号（77・79）だけは文様へと別方向に展開します。これは、これまで展開してきた絵画・記号の役割の終焉であり、記号のもつ意味、記号体系も古墳時代へ引き継がれる必要がなくなったことを表しているのでしょう。



76 龍の絵画（19次）

77 龍の記号（69次）

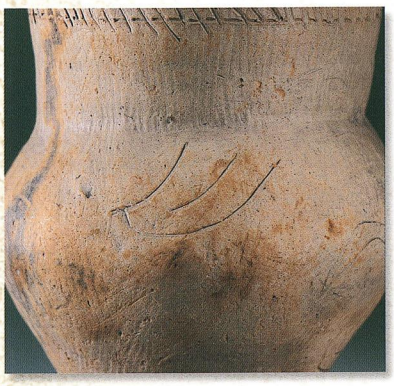
78 弧帯文（14次）

79 龍の記号と三叉記号（33次）

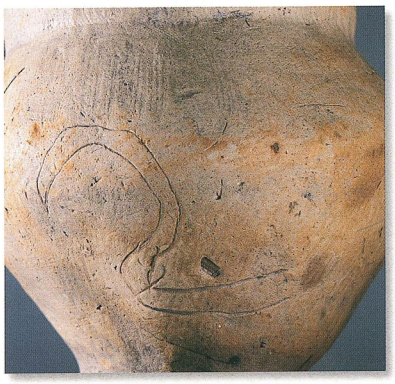
絵画·記号·文様　Drawings, signs and design

80 龍の記号ほか(33次)

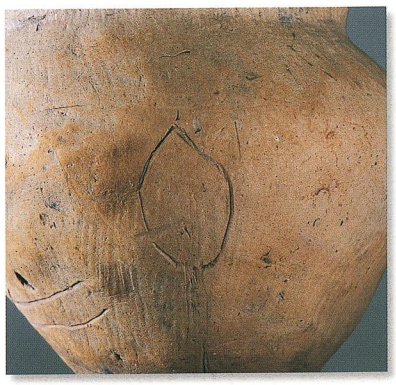
81 文様へ変化した龍の記号(74次)



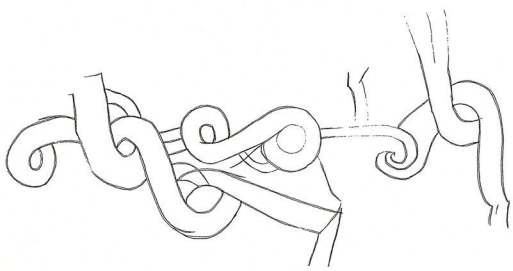
80 記号部分1



80 記号部分2



80 記号部分3



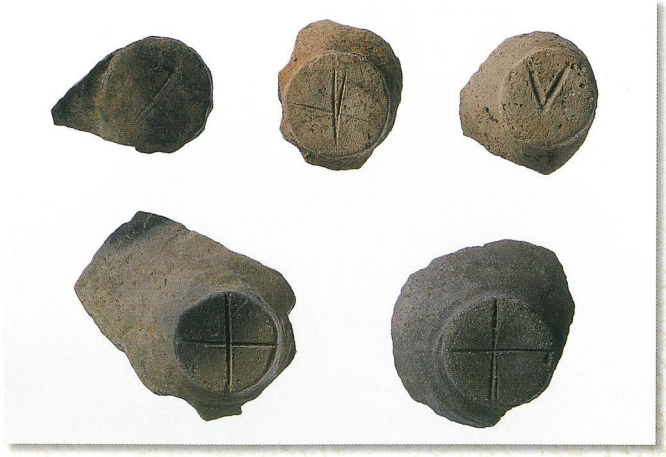
82 龍から変形した文様(91次)

83 絵画?・記号(3次)

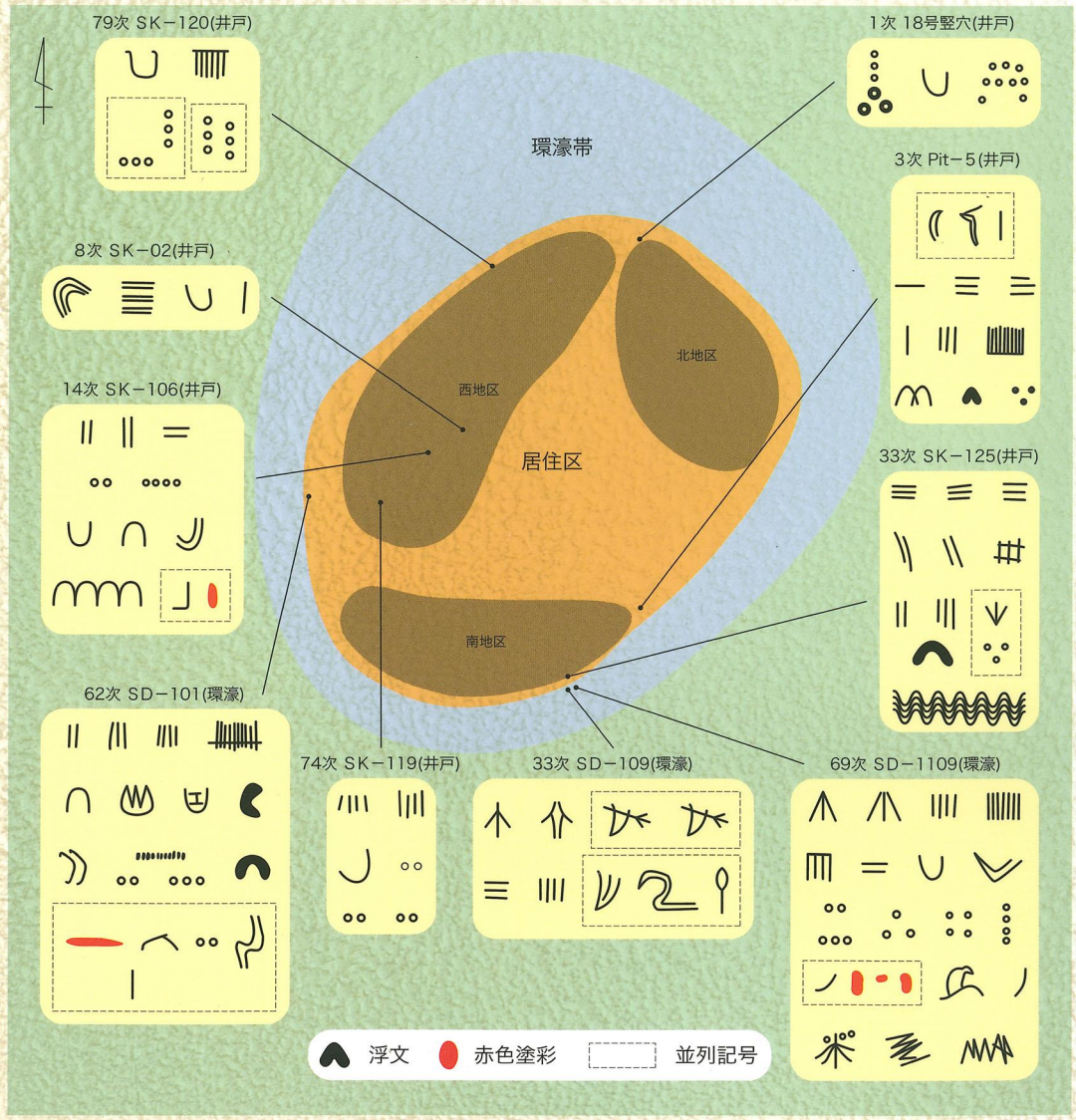
84 並列の記号(3次)

見えない記号

多くの記号は土器の胴部上半に記されますが、稀に目に触れることができない頸部内面(27上段右)や底部裏面(85)に刻まれるものがあります。これら記号は弥生時代後期のもので、底部裏面の場合、「X・十・V」など限られた記号が使われています。バリエーションが少なく、見えないところに記されていることから、他の記号とは性格が異なるかもしれません。



85 底部に記された記号(69次ほか)



唐古・鍵遺跡の主要記号土器出土地一覧図

凡例

1. 本書は、唐古・鍵考古学ミュージアム 平成21年度秋季企画展「弥生グラフィティー」の展示図録として作成しました。
2. 本図録と展示構成は、一部異なるところがあります。また、掲載写真は、展示品と異なるものや展示品の全てではありません。掲載写真及び展示品は全て唐古・鍵遺跡出土品です。
3. 企画展の講演会として、10月24日(土)「弥生記号の世界〜記号の意味するところ〜」と題して、奈良県立橿原考古学研究所総括研究員 橋本裕行氏を予定しています。
4. 展示および図録の作成に当たっては、下記の機関ならびに個人の方からご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。
   奈良県立橿原考古学研究所／寺澤 薫・清水昭博・鈴木裕明　　写真撮影:亀村俊二・佐藤右文
5. 本図録・企画展は、中尾澄子・河森一浩・西岡成晃・藤田三郎が担当しました。

会期　2009年10月17日〜11月22日

平成21年度 秋季企画展「弥生グラフィティー〜唐古・鍵遺跡の記号土器〜」
唐古・鍵考古学ミュージアム　展示図録 Vol.10

発行日／2009年10月17日　発行／田原本町教育委員会
編集／唐古・鍵考古学ミュージアム　〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1